

近世城下町町人地の設計論理に関する研究

—近世城下町秋田を事例として—

A Study on the Design Principles of Modern Castle Town of Akita

○松崎翔矢¹, 阿部貴弘², 天野光一²Shoya Matsuzaki¹, Takahiro Abe², Koichi Amano²

Abstract: Castle towns in the modern era had unique urban structure composed of well-developed infrastructure, such as streets waterways and drainage. In this study, using historical materials, topographic data, and old maps, the design principles of downtown in the castle town of Akita has been clarified.

1. はじめに

我が国の主要都市の多くは、近世城下町をその基盤としている。近世城下町の町人地は、水路網と街路網が複雑に入り組んだ、日本独自の大変興味深い都市構造を有していた。ところが、そうした近世城下町町人地がどのような論理に基づき設計されたのか、その設計論理については、長年の研究にもかかわらず十分に明らかにされているとは言い難く、現状では個別の城下町を対象とした事例研究の蓄積段階にある。特に、水系設計の論理については未解明な点が多い。

こうした背景を踏まえ、本研究では、城下町相互の比較分析への展開を視野に入れ、近世城下町秋田を対象として、城下町町人地の設計論理を解明することを目的とする。

2. 研究対象地の選定について

近世城下町秋田は、近世の都市構造がその後大きく変化することなく現在に引き継がれているとともに、河川の付け替えを伴う水系基盤の整備により城下町が建設されたことから、水系設計の論理をはじめとする町人地の設計論理を読み解くうえで適切な対象であると考えたことから、研究対象地に選定した。

3. 分析視点・方法

城下町町人地の設計論理を解明するため、Figure 1 に示した分析視点から、絵図や地図、文献史料等の分析を行う。

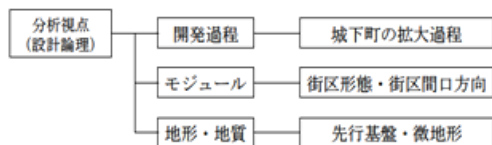


Figure 1. Analysis viewpoint

さらに、Figure 1 の各分析視点に対応する分析方法

1 : 日大理工・学部・まち 2 : 日大理工・教員・まち

及び使用する資料を Table 1 に示す。

また、分析に用いる絵図を Table 2 に示す。

Table 1. Research method

分析視点	分析内容	分析史料
開発過程	開発過程において、何を優先して開発が進められたのかという点から、設計にあたっての優先度を読み解く。	文献史料 絵図
モジュール	街区形態、街区間口方向に着目し、設計にあたりどのような要素が優先されたのかを読み解く。	文献史料 絵図
地形・地質	微地形図を基に、地形とインフラ及び街区との関係から設計論理を読み解く。	文献史料 地形データ

Table 2. List of old maps used in this study

絵図名	年代
御国替当座御城下絵図	1603
出羽国秋田群久保田城画絵図	1645~1648
外町屋敷間数絵図	1663
御城下絵図	1759
羽州久保田大絵図	1818~1830
久保田城下絵図	1849

4. 分析結果および考察

(1) 開発過程

近世城下町秋田の開発は、城郭を構える台地の整地から始まった。さらに、台地の麓に流れる旭川が城下に水害を引き起こす危険があったため、河道の付け替えが行われた。旭川の付け替え後、旧河道は内堀・外堀として利用された。

1607 年から、城下の本格的な町割が始まる。藩主の前の居城であった土崎湊から、商人が秋田に強制移住させられ、移住先に大町が形成された。その 5 年後の 1612 年には茶町が形成され、徐々に町人地が拡大していった。さらに、1631 年には城下の改造が進められ、羽州街道が茶町筋から大町筋に付け替えられたほか、堀川の開削が進み、町人地の割り直しも行われた。こ

うした秋田城下町における開発過程の年表を **Table 3** にまとめる。

Table 3. Chronology of urban development in Akita

西暦	出来事
1602年	佐竹義宣, 土崎湊に入る
1603年	佐竹義宣, 久保田城築城普請
1604年	佐竹義宣, 久保田城へ移城
1607年	久保田城下の宅地割・町割が本格的に始まる 大町1丁目・大町2丁目・大町3丁目が成立
1612年	通町橋以南の堀川完成
1613年	土崎湊穀丁の者たちが上米町一丁目・同二丁目・下米町一丁目・二丁目を形成
1619年	上肴町を茶町筋へ移転
1629年	佐竹義宣, 通町の町並が歪曲しているため町屋の作り直しを命じる
1630年	佐竹義宣, 久保田城三ノ丸普請ならびに堀掘削土手築立のために詳細な指示を行う
1631年	佐竹義宣, 鍛冶町・馬口労町の街路貫通を命じ, 以後羽州街道は馬口労町から鍛冶町・大町筋へ直通するようになる 通町橋上手の古川と同橋以南の新川が貫通・通水し, 城下を貫く旭川となる

(2) モジュール

外町屋敷間数絵図を参考に, 町人地における街区模式図を作成した (Figure 2). 町人地の街区形態は長方形で, そこに短冊型の宅地が配置された。

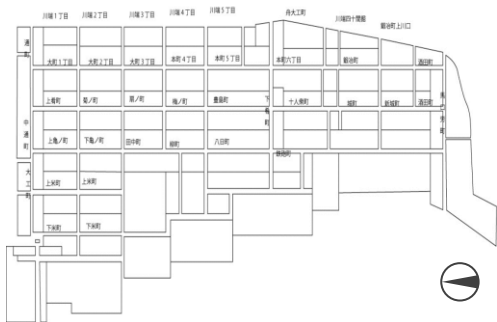


Figure 2. Schema of downtown in the castle town of Akita

街区は, 間口方向京間 50 間, 奥行方向京間 80 間を基本とし, 宅地の境界には背割下水が設けられた。

宅地奥行は, 大町 1 丁目から本町 5 丁目と通町の 6 丁は京間 25 間, 他は京間 20 間が基本となっている^[4]。一方, 旭川沿いの船大工町は京間 25 間~31 間, 馬口労町は京間 15 間~30 間となっており, 河川の屈曲の影響で街区及び宅地奥行が不整形になったと考える。

街区の間口方向は, 通町筋, 馬口労町筋, 下肴町筋においては南北に間口方向が向けられ, 他は東西に間口方向が向けられている。下肴町筋では, 横小路を重要視したことがわかる。

(3) 地形

地形に着目すると, 城下造成前, その後町人地となる地帯には, ゆるく起伏した原野が広がっていた^[2]。

その他, 大町 2 丁目付近が微高地となっており, 四十軒堀に向かうにつれて標高が低くなる。町人地の下水は勾配に沿って背割下水を南北に流れ, 旭川と四十間堀で排水されていた^[3]ことから, 地形の起伏を利用して水路が設計されていたことがわかる (Figure 3)。

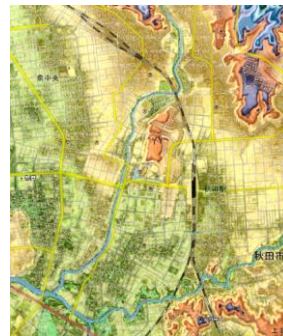


Figure 3. Topographic map of Akita

5. まとめ

近世城下町秋田の町人地では, 微高地から開発が行われ, 城下町の発展とともに南へ拡大した。街区は, 旭川の河道に合わせて不整形となり, 水系が町割の基軸の一つとなっていることがわかる。水系設計では, 勾配を利用して排水路が設けられ, 地形が設計論理に影響を与えたことがわかる。また, 大町 1 丁目から本町 5 丁目の宅地奥行が基本より 5 間長く, これは町割にあたり街道を優先したためと考える。

6. 今後の課題

今後は, 町人地の街区計測などを行うことで, さらに分析を精緻にするとともに, 他の城下町との比較分析により, 設計論理をより精緻なものとしていく。

7. 参考文献

[1] 秋田市:「秋田市史第三巻 近世 通史編」,秋田市, pp.545, 2003
 [2] 渡部景一:「佐竹氏と久保田城—秋田の歴史と物語—」, 無名舎出版, pp.41, 1979
 [3] 渡部景一:「秋田市歴史地図」, 無名舎出版, pp.138, 1984